あぷりのサプリ

vol.12
2020.6.5

あぷり志紀　ケアマネージャー

中島（なかじま）まちこ

２０１２年に入社した中島まちこさんは、あぷり志紀の立ち上げ当初からのメンバーで、ケアマネージャー、鍼灸師としての職務をこなしながら、シニアヨガの指導も行うなど多方面で活躍しています。日々明るく前向きに仕事に励む中島さんのこれまでの功績と仕事への取り組み方に迫ります。

時間優先の職選び

入社するきっかけとなったのは、10数年近く鍼灸師として働いてきた中島さんが、保育園に通う子どもの迎えに間に合うように、午後5時半までの仕事を探し始めたことでした。

あぷり志紀はその条件を満たしており、更には事務員としての募集だったため、元々総務の仕事に興味があった中島さんは入社することになりました。当時はまだプレハブの事務所で社長や副社長と共に仕事をする毎日でした。

「事務の仕事は楽しかったですよ。自分が足りない部分はどこなのかもたくさん気付けましたし、学ぶこともとても多かったですから」。

それからしばらくすると、最初のターニングポイントを迎えることになりました。

新たなる展開を受けて

入社から半年ほどが過ぎ、ようやく建物もでき上がって利用者様も増えてきた頃、中島さんは事務の仕事と並行して、利用者様への鍼灸治療を行うことを社長から勧められます。

「最初にお話をいただいたときは、正直不安でした。鍼灸治療は体に直接触れて異物を入れるという行為。落ち着いた気持ちで行わなければ、痛みや事故に繋がります。心に余裕があってこそできる仕事なのです」。

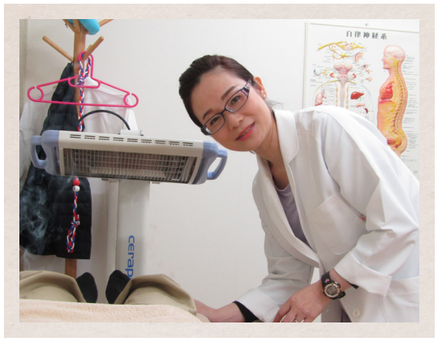
いざ始めてみると、状況はプラスの方向に進み始めました。全く種類の異なる二つの仕事を交互に行うことで頭が切り替えられ、良いリフレッシュになったのです。

一つの仕事に集中するよりも、いくつかの仕事に同時に携わるほうが自分には合っていて、いい結果を生み出せるのかもしれない。中島さんはそう感じたのでした。

二足の草鞋を強みにして

二つの仕事を両立し、充実した日々を送っていたところ、更なる転機が訪れました。あぷり志紀のケアマネージャーが退職し、以前から資格を保有していた自分がその任務に就くことになったのです。

ケアマネージャーの仕事はケアプランの作成などが主ですが、大きな比重を占めるのは、利用者様や家族様からの相談ごとです。事務的な処理のみでは利用者様との距離はなかなか縮まらないものですが、中島さんの場合は鍼灸治療で関わっていることが功を奏しました。



「人は裸になったり、痛いところを治してもらったりすると、相手に心を開きやすくなります。そういった意味でも、鍼灸治療を行っていてよかったなと思いますね」。

進化し続ける理由

どんなに忙しいときでも、中島さんは常に探求心を忘れません。体が疲れているときに自分自身に鍼を打つのもそのうちの一つ。患者の気持ちと体になり、どこにどう鍼を打てば楽になるのかを体感しているのです。

また、偶然知ったグラヴィティヨガに魅かれ、雇用保険の給付制度を利用して講師免許を取得。レクリエーションの中にシニアヨガとして取り入れました。全ては自身の技術を高め、利用者様に良いものを還元したい。その強い思いこそが仕事への原動力となっています。

大切なのは初めの一歩

中島さんは、鍼灸治療やヨガといったアプローチを行う上で、一番難しいのは利用者様に継続していただくことだと感じています。

「長く続けていただくには、まずは自分自身が利用者様や家族様から信頼を得ることが大事。私は、どんなときでも見られているという意識を持って、言葉遣いや所作に気を配り、少しずつ良い関係を築いていくようにしています」。

信頼関係をしっかり築けば提案を受け入れてもらいやすくなり、さまざまな仕事も任されるようになります。それは職員に対しても同じで、共に働く仲間たちと良い雰囲気で仕事ができるように、日頃から意識して行動しているのです。

人間力を育てていく

中島さんは２０１９年10月から接遇委員になりました。

「接遇とは、言葉遣いなどのテクニックであって、メッキのようなものだと思うんですね。いくらテクニックが優れていても、おもてなしの心がなければメッキはすぐに剥がれてしまう。本物の金色になるためには、心を鍛えなければなりませんね」。

接遇委員に任命され、そう考えるようになったという中島さん。現状に満足せず、常に先を見据えて自らを高めていくその姿に、今後の更なる活躍を期待せずにはいられません。